●ともかわ・かずき
1950年生まれ。山本郡八竜村（現・三種町）出身。本名・及位典司（のぞき・てんじ）。能代工業高校出身。1970年代初めフォークソングに影響を受け、アコースティック・ギターを独習し、1974年歌手デビュー。その後は俳優や、画家としても才能を発揮し、1985年東京で初の個展を開催。さらに映画音楽や海外公演と活動の場を広げている。2015年1月自伝的エッセイ「友川カズキ独白録 生きてるって言ってみろ」（白水社）発売。

友川カズキ独白録
生きてるって言ってみろ（白水社）
2,052円（税込）

原点は秋田にあり

今年3月20日に秋田市にぎわい交流館AUで開催されたコンサート
「友川カズキ　生きてるって言ってみろ 2015 in 秋田」の様子

歌手・詩人・画家

友川 カズキ

「三つ子の魂百まで」とよく言いますよね。小さいころの環境や、そこから得た基盤みたいなものは大きくなっても変わらないの。結局、場所が変わっても、全部応用みたいなもんなんだな。今年1月に、恥ずかしながら、本を出版させていただいたんですけど、そういうモノを創るとき、結局思い出すのは古里秋田のこと。それは頭で思い出すだけじゃなくて、「舌」というか「味覚」もそうなんですよ。一番自分で自分に驚いているんですけどね。あんなに小さなころに食べていたものが何十年たっても忘れられないんだよね。住む場所が変わっても、舌の記憶だけはどんどん田舎に戻っていく気がしますよ。小さいころに植え付けられた何かが抜けないんだな。

例えばハタハタ寿司。東京にはないし、地元の知り合いに送ってもらったりしていただいてますけど、これはやっぱり秋田特有の食べ物ですよ。それから、山菜の「ンニョ」（ニオウサク）とか、きのこの「サボダシ」（サワモダシ）みたいな、秋田の人にしか通じない言葉がまたいいの（笑）。東京に住んでいても、そういうのが突然フラッシュバックのように舞い降りてね。不思議だね（笑）。

東京では秋田の食べ物はなかなか手に入らないんですよ。ミズはたまに売ってるけど、小さいの。でも、ハタハタは手に入るんですよ。すぐ近所に市場があって、毎年冬になると大量に買いに行きますね。実は安いので、半分は塩漬けにして、あとは醤油で煮て食べますよ。秋田で売ってるハタハタと違ってぶりっこはあまり入っていないんですけど。あんなにおいしいのに、東京の人たちがハタハタってあまり食べないのはホントにわからないね。

ありがたいことに日本だけでなく、海外でもコンサートをやらせていただいていますけど、私、秋田でのコンサートはすごく嫌なんですよ（笑）。今年の3月にも秋田市でコンサートやったんですけどね。幼いころの悪ガキ仲間から、いろいろとお世話になっている知人、それに能代工業のバスケットボール部時代の恩師加藤先生も来るんだもの。会場の空気がいつもと全く違うんだな、これが。本当に恥ずかしいやら、うれしいやら。普段はコンサートの前日に気合いを入れれば大丈夫なんですけど、秋田でやるコンサートに関しては1週間前から気合いを入れないと間に合わない感じ。もともと小心者だけど、会場が秋田だと特に恥ずかしいね。

そしてうれしいことに、最近はコンサートも若い人が多くなって、どこも満席でね。ナインティナインの岡村さんがラジオで私の特集を何度かやってくれた影響もあると思うんですけど、一度来たお客さんが何度も足を運んでくれるのが本当にうれしいですね。こんな時代だからこそ、私の唄が少しでも心に響いてくれればね。

川崎で30年来通っているラーメン店のお米が、あきたこまちであることを最近知ったんですよ。男鹿の農家から取り寄せているんだって。秋田の農家が丹精を込めて作っているお米だから、美味しくないわけがないでしょ。

田んぼはお米を作るだけじゃなく、いろんな役割があるでしょ。眼でその風景を見て、情緒も育む。これからも大事にしなきゃいけないと思いますよ。まさに日本の心ですよね。日本人にとって、水田の四季の移り変わりは、古里そのもの。小さな苗を植えたばかりの水田、成長し青々とした豊かな田園風景、秋の頭を垂らす黄金色の稲穂、稲刈り後の切り株、そして春を待つ雪の積もった田んぼ…。実家が農家だったから、子どものころにみた景観が頭の中に残っているんだな。これは絶対に忘れることのない、自分の血のようなものですよ。

農協改革とはいっても、JAはなくならないんでしょ。農家の心情を汲んで、会長をはじめ、JAの皆さんには農家のためにどんどん発信してほしいですね。